

Alternative Systems Study Bulletin

第19巻第2号

(2011年6月30日)

●反・脱原発運動の発展方向について

運動の総括 電力行政における自治の課題 武器としてのまなざし

生活者の視点から放射能汚染を考える

ルネサンス研究所基幹研究会報告

武装闘争の総括 文化革命 党について 脱物象化

「緊急の課題」その後 質疑応答から

後記

編集 境 毅

連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169 号 貿易研究会

ホームページ <http://www.office-ebara.org/>

メール sakatake2000@yahoo.co.jp

会費 正会員 : 年間 1口 10万円

賛助会員 : 年間 1口 3万円

購読会員 : 年間 1口 1万円

振込先 口座名 : 資本論研究会

(郵便振替) 口座番号 : 01090-5-67283

反・脱原発運動の発展方向について

以下の文章は、6月14日ルネサンス研究所事務局会議に提案したレジュメを6月25日に補足したものです。

1. 原発事故に対するルネサンス研究所メンバーの文書

- ①原発 STOP メモ 2011年4月12日+補筆 田中正治
- ②反原発運動の現状(メモ) 2011年5月21日 新開純也
- ③2011.5.12 会議への個人的意見 2011年5月21日 戸梶博夫
- ④5・29 集会へのメモ 2011年5月25日 市田良彦
- ⑤反原発の闘いの前進のために 2011年5月23日 八木健彦

2. これらの文書に補足すべき内容

- ①日本における反・脱原発運動の総括
- ②現在の運動の特徴と発展方向

3. 問題意識

- ①「加害者」の社会運動は可能か
- ②協同組合的な働き方について

4. 日本における反・脱原発運動の総括に向けて

・現地の反対闘争、これに合流した都市の反対派と研究者。研究者は全共闘運動の時に全国原子力科学者連合が結成されたことを契機に現地の反対闘争とのかかわりを強めた。立地に反対できた自治体(21地区、『原子力市民年鑑』、7つ森書房、2010、59頁、原発おことわりマップより)と受け入れた自治体。受け入れた自治体での反対運動は個別の運動として孤立し切り崩されていった。総評の解体と連合の成立、あるいは社会党の分裂解体と軌を一にしているのかもしれない。影響力のある全国的な反原発政党の不在。原発立地地区では敷地内に次々に原子炉が増設された。

・基幹研究会で戸梶が提起した70年代から80年代階級闘争の総括の必要性。

・日本ではスリーマイルの事故ではあまり反響はなかったが、チェルノブイリ事故(1986年4月16日)で反対運動は新しく盛り上がる。四国電力伊方発電所の出力調整反対が運動目標。このときは従来の反原発運動に代わるニューウェイブの運動を作り出した。中心的組織はつくりず、行動提起はあるが参加者は自己責任で参加するというスタイル。画一的運動スタイルからの脱皮。

・呼びかけの仕方。1988年1月25日四国電力(高松)抗議行動:「自分の命の問題は自分の口で言うんだ。自分の耳で相手の話を聞きたい。他人に委ねるわけにはいかな

いという人たちが来てください。そういう人たちのためにつくった場所ですから。」

(『クリティーク』12号、小原良子論文、24頁)

・オールドウェイブからの批判。「そういうやりかただと人が集まらない、力にならない、統率がとれない、責任がとれない、だからいかん」(同書、24~5頁)

・しかし1月25日には高松に1000人集まる。署名は2週間で56万人。新たな参加者は食品の安全を求めて共同購入している人々など多種多様。引き続き2月11・12日の抗議行動には4000人集まる。署名は100万人を越す。集会では大衆芸能の競演がなされた。

・ニューウェイブの運動原則についての中島のまとめ。

「①この行動は、参加者の一人一人の意志と責任において実施されるもので、行動全体を指揮・統率する団体や個人はありません。各個人、グループが自らの正義と責任で判断し、行動してください。

②この行動については、参加者は、一人一人当事者として何人も同じ位置にいます。・・・(行動の場と情報について呼びかけはあるが、参加は自由。いつでも退場可能。)

③(上記の原則)を理解していただける人であれば、この行動は全ての人に開かれています。(納得できないグループ、団体は別行動をお願いします)」(同書、32~3頁)

・しかし、ニューウェイブの運動は継続しなかった。運動の結集点で、「出力調整を許せばチェルノブイリの再来になる」というものだった。これはそうはならなかったもので、運動は終息に向かう。同時に起きた広瀬隆バッシング(具体的な文献等については調査中)。広瀬隆はチェルノブイリ事故のあと全国各地で講演し、反原発運動の火付け役となった。『危険な話』(8月書房、1987年)はその記録である。

・ニューウェイブとオールドウェイブの抗争。1988年4月チェルノブイリ2周年集会(2万人)で、「脱原発法(仮称)制定運動」を発足させた。これでは大衆運動は起こせない。

・ニューウェイブの主張は自然発生的な大衆運動の発展の論理としていつも現れるもの。これは今日、素人の乱(高円寺のリサイクルショップを経営しているグループ、『素人の乱』、2008年、河出書房新社、参照)の反原発運動として再現している。組織動員だった60年安保闘争後に登場した大衆運動はベ平連だが、個人の意思を運動の出発点にしている。さかのぼれば谷川雁の大正行動隊(やりたい者がやりたい時にやりたいように闘う)もそうで、次の3原則があったという。

①やりたい者がやる、やりたくない者はやらない。

②やりたい者はやりたくない者を強制しない。

③やりたくない者はやりたい者の足をひっぱらない。

全共闘は少し違うが、90年代の環境運動はこの論理を体現している。例えば地球村を提唱した高木善之は、「非対立」をとらえ、①事実を知る、②できることから実践する、③広く伝えていく(ネットワークする)、ということをして講演活動を行っている。

・大衆運動では運動の結集点の内容が大事。どのようなスローガンを掲げるか。「原発止めて、いのちがだいじ」「原発なしで暮らしたい」はいずれも被害者意識にとどまっていた。

・組織動員が出来ない時代に、大衆運動の再生産は可能か。あるいは大衆運動を伝統

的な組織化の方法では発展させられないという問題をどう解決するか。

5. 現在の運動の特徴と発展方向

- ・事故は収まらず、関東東北では継続的に放射能汚染が続く。大衆運動継続の条件はなくなっていない。運動はニューウェイブのセンスで継続されるであろう。
- ・汚染食品をどうするかについても、新しい考え方が芽生えている。チェルノブイリのときは汚染食品の輸入制限だった。今回は子どもと大人で食べ方を変えるようなことが取り組まれている。
- ・原子力推進派の権力構造が打撃を受けると共にその無力性が暴露されているが、しかし代わりの勢力は未形成である。
- ・大衆運動の結集点を原子力推進派の権力構造を解体し、代わりの勢力を形成していくという展望の中で決めていくことが問われている。
- ・発電・送電の分離の迫及は電力独占の弱い環を攻撃するものとなりうる。
- ・地方自治体に対する原発再運転の阻止要求も現実的な政策足りうる。
- ・ここで、「加害者」としての社会運動は可能かという観点から考えてみたい。従来の反・脱原発運動が被害者の立場から取り組まれていたことに対して、「加害者」としての立場からの運動提起が構想されるべきだ。被害者・加害者の問題は、古くは全共闘運動が、加害者としての大学人としての自己否定を掲げ、環境保護運動では、被害者である消費者が同時に環境汚染の加害者であるという認識がなされていた。前者では自己否定するという個人的な解決と別の生きかたの探求という方向へと収斂され、後者の場合は加害者としての自己の生活を加害を与えないように改善していくという解決法が採られた。
- ・今日の事故に始まる原発を止める運動にあっては、従来の加害者性の受け止め方とは違ったやり方が求められている。まず「加害者」としてあるという中身が、原発促進の容認あるいは反対したけれどもその意志が実現できなかった、ということだから、その責任を自らが負うという問題設定が可能だ。大学制度や、環境汚染と違って原発推進は国の政策であり、これに対する責任とは極めて政治的なものとなる。そうだとすれば、この責任を認めることから、政治的な社会運動が展望できるのではないか。
- ・まず本当の加害者をあぶりだしその責任追及が必要である。被害者としての責任追及ではなく「加害者」という立場からの責任追及は、事故の対応をお任せにするという形ではない責任の追及となろう。つまり自己決定、自治の観点からの本当の加害者への責任の追及である。
- ・ところでホロウエイは新著『革命』（河出書房新社）で労働者は搾取されつつも、他方では資本自身を作り出している資本の共犯者でもあることを強調している。労働者の加害性への指摘である。これを踏まえた労働者の運動はどのようなイメージとなるか、次に考えてみたい課題である。

6. 今後の運動についての試論

①生産における自主管理

・自己決定、自治という時に、その原理は生産における働く人々の協同組合的経営に求めておく必要がある。それがあって始めて地域で自治体に対抗する自治組織作りが課題となるからだ。地域で活動する時に、自治体に対して個人単位の市民という立場では対抗できず、何らかの事業を展開している法人組織が連合することが問われるのだ。

・協同組合的経営を実践するとき、それは実は生産現場の中に新しい社会を生成させるという課題の解決を迫られることが判明した。今日私たちが生活している社会は、わざわざこの社会を存続させるための意識的行為を要求されない。皆が自分の利益を追求していれば、市場の働きでおのずから調整がなされる、というほど単純ではないが、公的領域（国）と私的領域（市場）のいずれも、それを日常的に維持するための特別な課題が人びとに与えられているわけではない。従順に従っておれば日常は流れて行く。社会そのものは個々人の意志に関わることなく存続しているように思われている。しかしこのように無常に流れていっているように見える日常の社会も、実は無意識のうちでの個々人の行為によって絶えず更新されていっている。

・新しい社会生成という課題を考える時に、結論から言えば人々は対面関係において都度社会を生成している、というイメージから出発する必要がある。対面関係では、ふたりの人は交互に見る側と見られる側に立つが、見る側が見られる側に対して無意識のうち一般社会を代表してしまう。今日の社会では対面関係での見る側が無意識のうち一般社会の代表者としてふるまうことで、社会が都度生成されているとすれば、この関係の力学は社会のあらゆる場でも貫徹している。雇われて働くことは当たり前というまなざしで見られている人が、そうではない協同組合的な働き方を貫くためには、そのまなざしを変えるだけのものを発信できることが問われる。そのためにはどのような課題を解決しなければならないのか。一般的社会のまなざしに対抗するとすれば、それは新しい社会を創ろうとするところからしか始まらない。見る側のまなざしは無意識のものだから、それを変えていけるものは新しい社会が「いま」「ここ」にあるという現実しかない。

・協同組合的な働き方は、働く場に新しい社会を創ることだ、という課題が見えてきた。社会を維持するためにわざわざ努力する必要がないという今日の中に、新しい社会をつくる努力をする。無意識で済んでいた事柄を意識的にやってみる、こんなことがはたして可能なのか。高円寺の素人の乱は、この問題を自分たちは既に革命後の社会を生きているという問題提起から取り組もうとしている。

②電力行政における自治の課題

・自治を論じるにあたって協同組合的な経営の問題から入ったことに違和感を感じたかもしれない。しかし政治的自治に関して日本人ほどイメージを持たない国民は世界広しといえどもいないのではないか。例えば、署名運動は集めた署名の効果が疑わしいし、集める方もいい加減なので意味がない、自分の意志で参加し自分で責任を負うデモのほうがいいとあって、若者に話しかけている学生運動を経験している元教職員がいたが、この人にとっては署名活動が参政権であることすら理解されていない。名古屋市のリコールも署名で実現されているというのに。とにかく自分の責任で政治や電力行政をどうするかについて考えるというチャンネル自体が失われていて、被害者

としての要求運動しかなくそれも個人の実存的欲求の満足という尺度で運動を評価しているのだ。(これは基幹研究会での表三郎報告、日本人の自己意識の非社会性という問題と関連している)

・自己決定、自治の観点からの本当の加害者への責任の追及である、と述べたことの意味はここにある。今や私たちは個人としては非力けれども電力行政に責任を持つ主権者としての意識を持ち、政治的な参画をなしてあげていける道を作り出さなければならないのだ。これは節電に協力する賢い消費者というイメージではなく、地方自治体に対する参政権を最大限活用しながら電力行政の自主管理の可能性を探り出していくことなのだ。このような構想を作り出すことこそはルネサンス研究所の課題ではなかろうか。

③武器としてのまなざし

・見る側が持つ社会を代表したまなざしを変えることを考える時に、3.11以降社会を代表しようにも一般的社会のイメージが漂流し、代表しようがないという現実がある。今や、原発推進のまなざしと、反・脱原発のまなざしとが競合しあっている。まなざしが社会を創るということを考慮すれば、この競合しあっている現実の中で、反・脱原発のまなざしを強めていける方策を明らかにし、実践していく必要がある。

・ソ連の崩壊も、まなざしによるものだったのかもしれないと思い当たっている。あい争う階級の闘争というイメージではなく、支配階級である官僚が、もうどうにもならないほど国を統治する能力を欠乏させ、人びとの視線に官僚自身が恥ずかしい思いをするというまなざし革命ではなかったのか。

・今の日本の官僚制も崩壊前のソ連と同じ程度に統治する能力を欠乏させている。日本の原子力推進を進めてきた、政・官・業・報・法の権力構造を具体的に暴き出し、それを人々の非難のまなざしの対象と出来るような政治的仕掛けが用意されなければならぬだろう。官僚が自身の子供たちから「未熟な大人で恥ずかしいよね」(制服向上委員会、脱原発の歌より)というまなざしを向けられる時、支配は解体していくであろう。ルネサンス研究所はこの政治的仕掛けを作り出す仕掛け人となれるであろうか。

・組織的な動員が出来ない時代の大量運動の再生産はいかにして可能かという問題を考えてみよう。もしまなざしが武器として現在の日本の支配階級の解体に有効に作用するとすれば、まなざしを作り出せるような場をいろいろなところに作り出すことが運動の再生産を保障することになる。政治的意思統一ではなくまなざしを作り出せるような場は、新しい社会生成の場あるいは文化生成の場であろう。問題は電力行政についての自治の意識を持ち、それを具体化していける過程を創造していくことに尽きるであろう。

●新しい問題提起の項目をまとめておく ①ネットワーク型の大量運動の論理 ②「加害者」の社会運動は可能か ③協同組合的働き方における社会生成の問題 ④「加害者」の社会運動としての電力行政の自治 ⑤武器としてのまなざし

生活者の視点から放射能汚染を考える

原子力について詳しい方はスルーしてください。自分で汚染の計算と汚染の程度を知ることができるように生協の組合員向けに情報をまとめてみました。

はじめに

原発事故で様々な情報が流されていますが、生活者にとって必要な知識がまとめられているわけではありません。放射能と付き合う生活を強制されてしまった私たちにとって一番必要な知識は、自分の身を守るのに必要な情報を解読できることです。

まず、いつも報道されている放射能の測定単位について理解しておきましょう。

1. シーベルト

・一番なじみとされてしまったシーベルトは人体に対する被曝量です。国の基準は次の通りです。

成人の被曝限度は年間1ミリシーベルト。

原発で働いたり医療関係で働くなどの職業人の年間被曝限度は50ミリシーベルト。

・単位は1シーベルト=1000ミリシーベルトで、1ミリシーベルト=1000マイクロシーベルトです。

・新聞などで公表されている被曝量は1時間あたりの線量で、単位はおおむねマイクロシーベルトです。たとえば、5月29日朝日新聞朝刊では、飯館村の線量が2.81マイクロシーベルトとなっていますが、この値に、24時間と365日を掛ければ年間被曝量が計算できて、約25ミリシーベルトとなります。

・成人許容量の年間1ミリシーベルトは、毎時0.114マイクロシーベルトとなります。この、毎時0.1マイクロシーベルト以上の地域は福島県のほぼ全域で、茨城県、宮城県にも広がっています。

・福島小学校許容量について、政府は、国際放射線防護委員会(ICRC)の提言(年間被曝限度1ミリシーベルトを20ミリシーベルトにまで緩和)を受けてその最大値年間20ミリシーベルトまで決めました。この値は、単純計算すれば、毎時2.3マイクロシーベルトですが、24時間被曝はしないということで校庭での被曝量を毎時3.8マイクロシーベルトまでにしているようです。これに対しては反対の署名運動や、直接文部科学省への抗議行動があり、文部科学省も譲歩しています。その経過については8.を参照してください。

・職業従事者許容量の年間50ミリシーベルトは、毎時5.7マイクロシーベルトです。従来職業従事者でこの限度にまで達するのは稀でした。しかし今回の事故で政府は年間被曝量の限度を250ミリシーベルトにまで上げました。それほど事故現場の汚染はひどいのです。例えば毎時10ミリシーベルトの現場で1時間働けば、25日で限度になります。

2. ベクレルとシーベルト

・シーベルトは人体に被曝した放射線総量（被曝量）のことでした。これに対してベクレルは放射線源の量（被曝源）です。食品の汚染についてはベクレルで表わされます。

・国の食品に対する汚染限度はかつては輸入食品に対して 370 ベクレル/kg でした。これはチェルノブイリ事故の後に決められたものですが、今回の事故を受けて国内で生産される食品の基準値が次々と決められています。（7. 参照）

・ベクレルはシーベルトに換算できますが、放射性物質（核種）がいろいろあると換算は難しくなります。核種ごとに換算係数が決まっています。そして換算されたシーベルトは人間が食べたものから一生浴びる放射線です。（3. 参照）

・計算はネットで換算できます。たとえば 370 ベクレル（kgあたり）のセシウム 137（国の基準内）を含む食品を 100 グラム摂取した時の生涯の被曝量は 0.481 マイクロシーベルトです。同じものを一年間摂取し続けた時の生涯の被曝量は 175.565 マイクロシーベルトです。

・年間 1 ミリシーベルトは外部被曝の限度ですが、今問題としているのは内部被曝です。被曝量は放射性物質からの距離の 2 乗に反比例しますから、内部被曝は微量の放射性物質でも高い被曝となります。しかし現状では内部被曝と外部被曝の合計で考えているようで、6 月 4 日朝日新聞朝刊の記事では、東電社員が内部被曝 210~580 ミリシーベルト、体外被曝 73,71 シーベルトで合計すると最大 650 ミリシーベルトになり、引きあげられた許容量 250 ミリシーベルトを超えていると報告されています。

3. 換算についての資料

・まず換算は仮定の数字です。実効線量係数は核種ごとにある想定に基づいて決められたもので、実態に合っているかどうかは不明です。以下の引用を参照下さい。

「実効線量係数（じっこうせんりょうけいすう）

体内に摂取された放射性物質から、組織や臓器の受ける線量を算出することは容易ではありません。なぜなら体内の組織や臓器に沈着している放射性物質の量を測定する必要があり、しかも、その量の時間的変化を追跡しなければならないからです。

そこで、摂取した放射性物質の量と組織や臓器が受ける線量の大きさとの関係をあらかじめ求めておくことにより、放射性物質の量に対応した被ばく線量を計算することができます。このときの摂取した放射性物質の量と被ばく線量の関係を表す係数を実効線量係数といいます。」

・ネットから、数字を入れただけで換算できる式を以下に引用しておきます。

1kg 当たりのベクレル値 (Bq/kg)

1 日当たりの摂取量

摂取量の単位

g(グラム) ▼

摂取日数(日)

1

放射性物質の種類

ヨウ素131(基本は) ▼

摂取方法

経口摂取(食物) ▼

計算

この四角に数字を入れると値が出てきます。しかしその値が何を意味するかは今のところ明確な説明はありません。ガンにかかる確率計算は別にあります。

・次の表は核種別の換算係数を示したものです。

I はヨウ素、Cs はセシウム、Pu はプルトニウム、Sr はストロンチウム。

核種	半減期	経口摂取 (Sv/Bq)	吸入摂取 (Sv/Bq)
I-129	1570 万年	1.1×10^{-7}	3.6×10^{-8}
I-131	8.04 日	2.2×10^{-8}	7.4×10^{-9}
I-133	20.8 時間	4.3×10^{-9}	1.5×10^{-9}
Cs-134	2.06 年	1.9×10^{-8}	2.0×10^{-8}
Cs-136	13.1 日	3.0×10^{-9}	2.8×10^{-9}
Cs-137	30.0 年	1.3×10^{-8}	3.9×10^{-8}
Pu-238	87.7 年	2.3×10^{-7}	1.1×10^{-4}
Pu-239	2.41 万年	2.5×10^{-7}	1.2×10^{-4}
Pu-240	6564 年	2.5×10^{-7}	-
Sr-89	50.5 日	2.6×10^{-9}	7.9×10^{-9}
Sr-90	29.1 年	2.8×10^{-8}	1.6×10^{-7}

・これらの係数は国際放射線防護委員会 (ICRP) が決めています。この団体は原発推進の立場であり、内部被曝や晩発性障害について甘く見えています。ゴフマン博士は、30 倍以上の危険度を示しています。欧州放射線リスク委員会 (ECRR) は上記委員会に批判的な研究者グループです。

4. 放射能について

・放射性物質と同じ意味で放射能という言葉が使われています。放射性物質は不安定

で、崩壊して他の元素になりますが、その崩壊時に放射線をだすのです。

・放射線とはアルファ線、ベータ線、ガンマ線、中性子線などで、これらが身体に影響を与えます。アルファ線はヘリウム原子で生体内ではすぐ止まり、細胞破壊は少ないが細胞は致命的損傷を受けます。体内被曝では被害を大きくします。ベータ線は生体内で数ミリから数センチ入り込み、影響を受ける細胞は多くなるが損傷は軽いです。これも内部被曝では影響をまろに受けます。ガンマ線は浸透性が強く、半分は何もせずに生体を通過し、半分はベータ線並みの影響を与えます。

・核種とは放射性物質の種類で、原発の運転で出来る死の灰は、ヨウ素 131 (半減期 8 日) セシウム 137 (半減期 30 年) など 200 種あります。気化するもの、微粒子で漂うものなどさまざまです。

・放射線の強さは核種からの距離の 2 乗に反比例します。内部被曝が深刻なのは、アルファ線やベータ線の被曝とともに距離がゼロに近いということがあるからです。放射性雲が雨で地上に放射能を降らせると地上の汚染が高まります。放射能の汚染は同心円的に拡大するのではなく、風向きと雨によってまだら状に高濃度汚染区域が出来、ホットスポットと呼ばれます。

・放射能の強さの単位はベクレルで、1 秒間に 1 個の崩壊を起こす場合に 1 ベクレルと呼びます。

・ラジウム 1 グラムの放射能の強さは 1 キュリーでこれは 370 億ベクレルに相当します。また、ピコキュリーは 1 兆分の 1 キュリーで、1 ベクレルは 27 ピコキュリーです。

・レベル 7 (4 月 12 日に引きあげ) とは数万テラベクレル以上の放射能の放出 (テラは 1 兆倍) です。現在までの放出量は 37 万~63 万テラベクレルで、チェルノブイリ (520 万テラベクレル) の 1 割ほど (4 月 13 日現在) ですが、これで福島原発の総放射能の 1% にすぎません。

5. 被曝について

・「1 キログラムの組織当たりに加えられた放射線のエネルギーが 1 ジュールの時、この線量を 1 グレイとし、これに生物学的効果係数を掛けたものを、シーベルトとする。」

・1 シーベルトはセシウム 137 のガンマ線を、体重 53 キロの人が 500 兆浴びたことに相当します。貫通したガンマ線は含めません。

・1 シーベルトは、100 レムに相当し、また 100 レントゲンに相当します。

・0.1 (100 ミリ) シーベルトの被曝とは、セシウム 137 のガンマ線で 50 兆個、ほぼ全ての人の細胞が 1 個ずつガンマ線を受けたことに相当します。ガンマ線 1 個のエネルギーの大きさは細胞 1 個に致命傷を負わせるに十分ですが、この被曝で死には至らないとされています。

・急性症状は 1 シーベルトからで、2 シーベルトを超えると死者が出始め、4 シーベルトで半数が死ぬ (半数致死量) といわれています。

・晩発性症状は、ガンや遺伝的障害で 10 年 20 年後に出てくる症状です。

・晩発性障害は集団線量という考え方で計算されています。人数×シーベルトが集団線量で、100 万人が 0.01 シーベルト被曝するのは 1 万人が 1 シーベルト被曝した場合に相当し、ガン死者数は同じと統計的に計算されています。

6. 自然放射能人口放射能との違い(生物による濃縮)

・自然放射能は地球平均で年間 2 ミリシーベルトですが地域によって違って、日本は 1.5 ミリシーベルトです。

・放射能による細胞破壊に対して細胞を修復する働きがあり、高度の被曝でなければ、被害はすぐには出ませんが、放射能による細胞への影響は自然放射能も人口放射能も変わりはありません。

・自然放射能を出す放射性物質について、生物は適応して体内に溜め込まないようにしてきました。しかし原子爆弾や原子力発電所がうみだす人工放射能は、例えばヨウ素 131 のように甲状腺に溜め込まれ内部被曝して甲状腺がんになる確率が高まります。そのため海洋や大気中や土地を汚染した人工放射能が生物によって摂取され濃縮されるという事態が起きます。海洋の場合まず微生物やプランクトンや海藻が濃縮し、これを食べた小魚に移り、さらに中型の魚、大型の魚と濃縮が進んで最後には食物連鎖のトップに立つ人間の口に入ります。

7. 現在の食品の暫定安全基準

これまでは国産品については基準はありませんでした。暫定基準は原子力安全委員会が決めている「防災指針」内の「飲食物摂取制限に関する指標」によるもので、これは短期の汚染を前提にしています。今回のように長期に続く汚染からすれば甘い基準だといえます。

(放射性ヨウ素/放射性セシウム、単位ベクレル/kg)

・ほうれん草、わかめ、ねぎ、しいたけ、たけのこ： 2000/500

・生卵、茶葉、ごぼう、こめ： なし/500

・シラス： 2000/500

・水、ヨーグルト： 300 (乳児は 100) /200

(出典『AERA』2011 年 6 月 6 日号)

・この基準内の値で、毎日食べ続けるとして、ベクレルをシーベルトに換算すると、生涯の被曝量が出るのですが、この内部被曝については、外部被曝と比べて無視されがちです。しかしこちらの方が深刻で、一時期は「しきい値」としてそれ以下の被曝では影響はないという説が流布されましたが、そうではなく低線量の被曝でも影響が出るのが疫学的に証明されています。影響を受けやすいのは胎児や乳幼児です。

8. 福島小学校許容基準 20 ミリシーベルト問題経過

・市民団体による経過報告です。「5 月 27 日、文部科学省は、『福島県内における児童生徒等が学校等において受ける線量低減に向けた当面の対応について』を発表し、この中で、『年間 1 ミリシーベルトから 20 ミリシーベルトを目安とし』としながらも、『今後できる限り、児童生徒等の受ける線量を減らしていくという基本に立って、今年度、学校において児童生徒等が受ける線量について、当面、1 ミリシーベルトを目指す』としました。また、校庭・園庭の空間線量率が毎時 1 マイクロシーベルト以上の学校の除染について、財政支援を行うこととしています。明言こそしていませんが、

年間20ミリシーベルトに基づいた校庭等の利用制限毎時3.8マイクロシーベルトを事実上断念し、棚上げにして、私たちがいままで求めていた通常の基準値年間1ミリシーベルトを目指すという基本姿勢を文書で示しました。これは、5月23日の福島の子供たちおよびそれを支援する多くの市民たちの要請にこたえたものであり、この間の市民運動が勝ち取った大きな一歩です。」

・なおこれまで署名活動や文部科学省への抗議行動を実施してきた市民運動は、この結果を踏まえさらに不備を追及する運動の継続を宣言しています。

9. 参考文献

・文献はたくさんありますがわかりやすく正確な小出裕章さんの本を紹介しておきます。

小出裕章『隠される原子力・核の真実』(2010年、創史社)
『放射能汚染の現実を超えて』(2011年再版、河出書房新社)
『原発のウソ』(2011年、扶桑社新書)

・内部被曝についての文献を追加しておきます。

J・M・グールド『低線量内部被曝の脅威』(2011年、緑風出版)
アメリカの原発周辺地域での乳がんの増加について疫学的に証明した文献。50マイル(80キロ)が危険地域と判明。フクシマ原発事故でアメリカが最初に80キロ圏からの避難を指示したのはこの文献の影響という説もある。

矢ヶ崎克馬『隠された被曝』(2010年、新日本出版社)
著者は、広島、長崎の原爆の被爆者の長期追跡調査にもとづき、低被曝でも内部被曝が病気を発症することを、原爆症認定集団訴訟で証言した。この訴訟は1件を除き勝訴している。

ルネサンス研究所基幹研究会報告

今年2月19日に開かれた基幹研究会のテープ起こしができて、私の報告部分を掲載します。とはいっても3.11がありこの報告の現実性という問題が生じていると思われる。報告紹介の後、この問題について後記で触れます。

「緊急の課題」(88年)について報告します。

今回のルネ研の結成には結構関わってはいましたが、あまり表にはでるつもりはありませんでした。新開さんが関西共産主義者協議会をやっていて、面白そうな話があれば出て、そのあとの飲み会には必ず出て、みたいな感じでお付き合いをしていた。その時には、みなさんが共産主義者なら僕は違うといつも言っていました。市田さんが共産主義をキーワードとしてルネ研の趣意書を書いた時に読んだら、僕の考えも入っている。ここまで共産主義の枠を広げるなら、自分も共産主義者宣言をしないとい

けないかなと思ひまして、文書『「いま」「ここ」での社会変革論』を書きました。この文書が実は私の現時点での共産主義者宣言です。本当はあれを叩いて欲しいと思っています。

今日の報告にいたる経過ですが、東京の様子を見て、市田さんが背中を押してくれたのもあって、この際さらし者になろうと「三つのテーゼ」を年末の基幹研究会打ち合わせの日に提案しました。いつの間にか研究会の幹事にされて、いつの間にか関西の基幹研究会の事務局長になっている。僕自身はルネ研で勉強会を続けていくことに関して何のイメージもない。最初のビッグバンだけをやりたいという気持ちで引き受けています。88年の文書の検討は、ちょっと遅いかなとも思いながら、個人的には大変光栄に思っています。

市田さんのメールの中で、歴史的背景、どういう現実的事態を念頭に置いて88年末にこんなことを書いたのかと質問がありました。緊急の課題の説明の前に、今日これだけは言いたいというのを書きました。以下に引用しておきます。

「三つの発見

1. 小なりとも軍事組織を作って武装闘争を始めると、国家になる。
2. 国家になると政治は党派の論理では不十分となり、国家による統治が問われる。
3. ソ連や中国の経験も含め、プロレタリアート独裁の国家による統治は未開発。

三つの課題

1. ソ連や中国での革命以降、プロレタリアートの独裁が実現されてはいない諸国でも文化革命が可能となった。
2. 文化革命の促進のためには政治の基準を文化におくことが問われる。
3. 文化革命は、本能的共同行為を迂回して不要とする脱物象化を実現する。

三つの結論

1. 二桁の党派も、何千万人の党派も、維持するための努力は同じ力量を要する。(指導者の資質の問題ではなく、党派の存在基盤が問題)
2. 一人で党派をつくれる人間を10人集めてひとりの人間のように組織できなければ新しい党派はつukれない。
3. 新しい党派は出来る時にはおのずから出来る。」

「三つの発見」「三つの課題」「三つの結論」というように簡単にまとめているのが、「緊急の課題」を書いた当時に僕が持っていたイメージです。この文書はRGの武装闘争の総括をした後に書いたもので、総括文書は『共産主義』の18号に掲載しています。すごく長い文章ですけど、83年に出しました。「緊急の課題」の最大のテーマは、ソ連社会主義の崩壊の総括です。唯一の自慢は崩壊する前に書いたことです。そこに行く前に三つの発見があった。寺田さんのなんであんなときに軍を作ったのだという話に関連しますが、軍事組織を作って武装闘争をやると国家になってしまうということがその一つです。

武装闘争の総括

共産主義者同盟(RG)を作る前に、関西で僕は直接関わっていませんが、RGとい

う軍を最初に作りしました。それで闘争をやって、その後内部の分派闘争があって71年にRG派を結成しました。69年に最初にRGを作った時に、それこそ党の革命が迫られました。第2次ブンドでやってきましたから合法党で職業革命家もほとんどいない。そこが中核派と全然違う所で職革がいなかった。一人佐野茂樹が党から給料をもらって、あとは自分で学習塾を経営したり、カンパ集めてみたいな話で。そんな党では軍を作ったら頼りにならない。軍を作る以上、労働者が仕事を全部やめて一つの部屋で共同生活するところから始めるわけだから、それこそなんでここにいるのかという話になります。目的は共産主義革命ですから、共産主義とは何かという話が自然と始まります。まず共産主義論争が起こって、それに対して2次ブンドは何も用意がなかったから、当時田原芳が一生懸命考えて論文を書いていた。

繰り返しますが、軍事組織を作って武装闘争を始めると、国家になっている。毛沢東の井岡山もそうだが、ちっちゃな国家になっている。連赤は領土を持ったけど、僕らのは領土なしの国家です。そうすると党派の政治ではない政治が問われます。国家である以上国家を統治する政治と党派の政治は別で、例えば規律違反だと党派なら党派なりに処分の仕方があります。国家だったらたとえば罪刑法定主義になります。党と国家の違いが全然分かっていなかった、ということで連合赤軍の総括の時に『赤報』4号に文章を書きました。

よく考えれば、ソ連も中国もプロレタリア独裁による国家の統治についての定見はないのではないということに気づきました。行き渡りばったりで、スターリンにしても右に行ったり左に行ったりでバランスを取っているだけで独自のやり方はみられません。もともと共産主義の理念は階級の廃絶で、階級の廃絶は商品・貨幣・資本の廃絶だから、それをやっているかと言えば、全然やっていけていません。スターリンは社会主義的な商品生産とかいって、ソ連の現実を合理化しました。プロ独の国家ができて社会を変えていける政治、変えるための政治は何もないのでは、ということに気が付いたのです。ではどんな課題があるか、ということで考えついたのが二つ目の発見です。

ソ連とか中国で一旦革命が起こった以上、その影響は全世界に波及していて、プロ独が実現されていない国でも文化革命ができるのではないか、という発見です。市田さんのコメントの中で『赤報』の社会革命、文化論に言及されていますが、その論文は僕らが改めて文化というのを言い出したきっかけです。レーニンの文化革命と毛沢東の文化革命の評価をして、その総括みたいな論文です。そこから先にいけなかった。改めて問題となる文革は毛沢東の文革ではなくてレーニンの文革です。それは単純なもので読み書きそろばんです。農民大衆が読み書きそろばんができないのをどうするか、ネップの時の最大の課題でした。それをやれば社会主義になるとレーニンは言っています。そういうことを念頭に置いて今さら、読み書きそろばんではないから、では何になるのかな。階級の廃絶に向けてどういう戦線が組めるのか、これは政治ではないという感じです。政治にしては広すぎるので。文化というとカルチャー、カルチャースクールとか日本では矮小化されたイメージで文化という言葉が使われているが、人間の生活の仕方丸ごとを文化と捉えたい、というように考えました。

文化革命

文化革命の中身には、ちょっと違った生き方をする事が含まれています。このもう一つ文化がどう伝わるかが問題です。文化はオルグで伝わるわけではないでしょう。雇われて働いている人とは別な生活をしているのはなんとなく分かります。百姓は百姓で、労働者は労働者で分かります。自分の生活している様式が持っている文化をそれぞれ無意識に発信しているのです。それにみんなが感染していく。ブルジョア文化も説得されるのではなくて、広告を見て、みんな真似、模倣をしていく、文化は感染していくということです。文化の組織論は感染していく。発信されたものに感染していく、とすると、発信していく大元は生活様式なのです。生活の仕方が人々の立ち振る舞いに現れてきます。それが人を捉えるのです。そんな意味を込めて文化と僕は言っています。そして政治の基準を文化に置こうと考えたのです。これは毛沢東が軍の基準を政治に置いたことに学んでいます。71年にRGを作った時には軍の基準を政治に置いて、政治軍隊と言っていました。

三つ目の発見は、「文化革命は本能的共同行為を不要とする脱物象化を迂回して実現する」とまとめました。商品とか貨幣みたいなものは商品所有者が無意識のうちで本能的な共同行為で作っているものである、『資本論』がこのように謎解きをしていることがやっと分かりました。この謎解きにもとづいて、商品・貨幣・資本の廃絶を政治的な力、法律、これは全部意志の力ですが、本能的行為を意志の力で直せるかという問題に思い当たったり、これは無理だと考えたのです。ソ連崩壊の基本的な原因は、この背理にあったのです。本能的な行為をなくすためには、本能的にやらなくてもいいような関係を迂回して作るしかないのではないか。それを脱物象化という言葉を使って、表さんから先ほど叱られました。僕らはずっと廣松物象化論批判でやってきたけれど、今では廣松とは別な意味で物象化の内容を規定して使っています。1999年に綱領を作って、HPに出しているのでも次回はそれをやってほしいと思っています。社会をどう変えるかということについての僕の結論はものすごく簡単です。漫画にして居酒屋にはっておきなさいと言うのが僕の主張です。みんな意味は分かったけど今すぐにはできないなと思っていて、突然エジプトみたいにできる。岡真理さんが書いていたけど、運動の記憶がずっと残っていて、60年前の運動、30年前の運動、20年前の運動の記憶が残っていて、それを元に現在があるというのです。日本の若者には決定的にそれがない。運動の経験が記憶として残っていないのが、日本の運動の最大の問題であると思います。その責任はわれわれの世代にあるでしょう。

党について

次は党に関してです。当時は党に所属していましたが、党の解散の声明も出していない。三々五々止めています。それは人数が少なかったからできた。せいぜい10人くらいしかいなかったのも、誰も文句を言わなかった。100人もいたら大変です。ゴルバチョフは当時1千万人の党員の書記長、僕ら10人くらいの党で、規模は全然違うのですが、党として維持しようとしたら、政治的力量は一緒だと気が付いた。10人でも党だったら大会、中央委員会をやって、と思ったら馬鹿馬鹿しくなって、もうやめたとなったのです。でもやってきたから、単に止めたでは済まないで、どうやったら党が再建できるのか言わなければならない。それが2番目で、一人で党派が作れる人間が7人くらい集まって作ろうかと言って、3年くらいしたらちゃんとできている。

これが党なんです。40年も党再建、再建と言ってまだできていない。これちょっとおかしいのではないか。10人10色じゃなくて、10色でもいいけど、一人の人間のように動けるぐらいの、あるいは理論的な内容なり、情勢がそうなるみんながそうせざるを得なくなるような、多分そうだと思うが。そうならないと次の党派はできないと思います。そういう意味でできる時には自ずからできる、こういうイメージです。このRGも自ずからできた気がする。誰かががんばってできたのではなくて、自ずからできています。テーゼを書いてからしばらくして、一番困ったのはソ連が崩壊して、崩壊の原因は自分なりに分かっているから、これで大論争に打って出られると思っていたのがそうはならなかった。出来なかった理由は分かりますか。湾岸戦争です。湾岸戦争によって政治的環境が一気に変わりました。反対の市民運動も起こったけど、崩壊の総括なんか吹っ飛んで、どうしようもなくなったのです。この状況で問題提起したけど尻切れトンボに終わりました。そのころから研究所を作るべきだと言っていました。最初何人かと始めたけど結局一緒にやる期間が長くなって、一人でやることになってそのまままきています。一人で研究所を名乗ってきたのです。研究所を作りたいというのはずっとあったけど、ここにできてしまったので、自分が研究所であるというのをやめて、情報誌(『ASSB』誌)は出しますけど、ルネ研に一体化してやっというと思っています。

市田さんのコメントで一番驚いたのは、党のイメージです。ブンドが革共同に解体されていく過程で、革共同と論争したから、革マル批判も書きました。革マル批判の最大のもは党組織論でした。市田さんによれば、ブンドの組織論は個々ばらばらで何も無い。だから学びようがなかったと言われている。多分その通りです。僕は党は道具だと返した。党=道具とは分からないとまだ言われている。党のイメージもこんなに違うし、最大限綱領、最小限綱領、それに大衆運動、言葉の意味がそれぞれ違うなど感じています。

脱物象化

ここで社会革命と書いているけど、ここに共産主義革命が出ていないのは面白い。共産主義者同盟ですから、今さら共産主義、共産主義と言っていない。軍を作った時に共産主義とは何かと解明することが問われて、資本主義批判と共産主義の規定は階級の廃止であると、これが理念です。階級の廃止は商品・貨幣・資本の廃絶。これがあるから、社会革命と書いているのも、それとリンクしている。社会革命派はいたし、叛旗派がそうでしたし、そういったイメージとはちょっと違うのです。

協同組合などが念頭に置かれているのではとされている。しかし、僕自身はそこを中心にしていない。若者を何とかしないとあかんというのがあるんです。プレカリアート、ニート。NPOでは引きこもりをサポートするNPOと、その人たちが事業をやるNPOに関わっているので、周りがそんな人たちばかりです。過去の階級闘争の記憶がない。だからどうしていいか分からない。しかも働きに行きたくもない。最大限綱領の要求は働きに行きたくないことです。賃労働はしたくないのが最大限綱領じゃないですか。誰も大企業に働きに行かなければ資本は廃絶される。労働者が毎日行くから資本が増殖されている。行かなければそれで終わり。しかし、そんなこと誰もできない、喰えないから。資本家のために価値を増殖せざるを得ないような労働に

従事していることを、理論で分かっているなくても、今の若者は肌で感じています。そこをなんとかして欲しいのに、世の中の前衛党はそれを言っていないではないか、ここで言いたかったのはそういうことです。大衆の意識、運動はそういうところに来ているのに、それに対して前衛政党的な名乗る人たちは何も準備していないではないか。そういう人たちに対して、少なくともユニオンを作ったり、場を作ったりするのは当然じゃないですかと言ってきた。そういう若者は大学に行った連中はオーバードクターで仕方がないからコンビニでバイトする。そこで労働組合を作る。フリーターユニオンを名乗ってやっている。連中は伝統的な総評系の左派労働運動をやりたいのじゃなくて、全然別の労働運動なんです。それがこの辺は全然理解できない。そういう人たちが出入りできるような場を作るといのがこの「絆」の課題であったと思います。できてよかったと思っています。

若い人たちは人から言われるのが嫌で、自ずから自分で気が付いて、発見して、それで動けるようです。外部注入そのものを拒否するし、拒否されます。そういう若者が多いのです。逆に言えば、自分自身で気が付いたように思える環境を、周りがどう作れるかということです。運動自体が今の社会の中で、労働者として働くのは嫌みみたいな感覚を持ちながら、しょうがないから働いている。ワーキングプアの状態、ちょっと闘争してユニオンを作った。それらがたくさんある。そういう人たちが次の運動の土台を担う人だと思っている。NPOとか協同組合も僕はやっているけど、本当はそういうのに期待しているのです。自然発生的な大衆運動が最大限綱領的な要求で組織されているとは、具体的にどういうことかという質問があったが、だいたいこういう意味です。

脱物象化について言えば、そういう人たちが自分を表現するのが、下手くそでできない。多分言葉を持っていないと思うのです。フリーターユニオンとかやっている連中がいっぱいいて、両宮処凛がスターになっていますが、彼らがちゃんとした言葉を持てるようにどうしたらいいのかというのが課題です。脱物象化はその辺のことを概念的に言っています。前衛党との関係では、今の最大限綱領は、フランスなどで起こっているのは、第4インターが反資本主義党になった。それはすごく教訓的だと思います。アンチ資本主義はどういう意味で考えるかによるけど最大限綱領です。第4インターは反帝国主義、その反帝国主義がアンチ資本主義になった。これが最大限綱領の要求で、最小限綱領的な政治からのフランスの若い人たちの離反じゃないかと勝手に思っています。アンチ資本主義と言ったことを評価せざるを得ないのです。それを彼らがどうやって意識してアンチ資本主義の路線を運動に繋げていけるか、そういう工夫をしているか分かりませんが、エジプトの運動でいったら最大限綱領レベルの要求で大衆が集まって権力を打倒するけど、別な権力ができて近い将来ひどい目に合う。多分そんなことの繰り返しになると思います。日本はしょぼいから投票で政府を替えた。政府を替えたけど、またひどい目にあっています。多分そんなことの繰り返しの中で、どれだけ陣地を作っていけるか、陣地戦はそんなイメージになるのかと思っています。

政治革命か社会革命か、最大限綱領か最小限綱領か、の話に関しては、99年の綱領は簡単な内容で、本能的な共同行為をして、みんな商品とか貨幣を作って、それが資本を生んで資本を増殖している。これは漫画に画ける。そうではない世界も漫画で画ける。その二つを居酒屋に掛けておく。それが僕の綱領なんです。

緊急の課題、その後

緊急の課題の三つのテーゼを出してその後どうなったかについて述べておきます。文化革命のイメージが具体的には分からなかったのが、誰も働き行かなければ資本は潰れることに気が付いて、その話を『情況』に書いた。働きに行かないためには自分で食わなければならない。それをどうするか。多分共同体とか運動体をそこから位置づけた。共同体とか運動体を作って権力にどう迫っていくかじゃなくて、そういう発想ではなく、そこに行くような運動として位置付けたいのです。個々の共同体、生協なんかも含めて、誰もが働き行かなくても生活ができるような社会にどう接近しているかみたいな話で位置付けたい。

地域通貨をやってみて、市場以外の交換手段はあるのか、ということについて考えました。迂回して作ると言ったが、何を作るのかということが、地域通貨ではっきりしてきたのです。今銀行が市場における支払決済システムになっています。お互いに口座をもっているから、貸金もそこに振り込まれるし、それを引き出して買う。購買に回ったお金がまた銀行に返っていく。こういう循環をして今の市場経済が成り立っています。地域通貨も支払い決済手段で通貨に利子は付けません。いくら借りてもいい。これが二つの特徴です。今の銀行を利子のつかない地域通貨の支払い決済機能に替えたなら、世界中の商品を交換するシステムはそれで可能です。その時資本は発生しません。地域通貨は未来の支払い決済システムのモデルが今できていると評価しています。ただ、今の時点で活動できている所はほんとうに少ない。それでもいいかな、ということで自分自身がやってきたレッツは休眠させています。働きに行かないことと支払い決済システムはできていること。リエターという人が国際決済を地域通貨でやることを提案しています。国際決済の方が早いかなという気がします。国際決済をそれにしたら金融資本主義は崩壊です。また恐慌が起きたらそんなところへ動く可能もあるかなと思っています。

最後に残ったのは組織論でした。さっき10年周期と言いましたが、僕も10年周期で88年に緊急の課題を書いて、99年に綱領を作って、少し遅れたが2010年に共産主義者宣言『「いま」「ここ」での社会変革論』を書きました。あれは社会性善論で国家論がないと言われたが、僕の国家論はあれです。人が対面関係で社会を再生産しているのを言いたかった。アダム・スミスは人間は人間社会の中で生まれて、他人を鏡にして、自分自身を創っていくと言っています。他人が鏡になるということは、僕が悪いことをしたら、ポケットから財布を盗ったら皆さん怒るでしょう。怒るということは法律の化身になっているわけ、生身の人間が法律の化身になっています。それが社会なり国家の起源なのです。もちろん歴史的起源はあるが、それは貨幣と同じ、日々貨幣も再生産されるというのが僕の説で、社会や国家も日々再生産されているはずで、そうでないと変革できない。日々社会や国家を再生産させる原点が人と人との対面関係にある、ということに気が付いて、これがコミュニケーション論を組織論として展開することができるのではないかと考えています。

質疑応答から

ヨーロッパは70年代の石油ショックで社会がぐじゃぐじゃになって、どうしても

ない状態になって、若年失業率がすごく高くなった。その時から若者をどうするかで政策的にもいろいろ手を打ってきている。ところが日本は石油ショックの後一人勝ちした。80年代のバブルの時は一瞬世界の金融大国になった。銀行を10くらい並べたら7つか8つ日本の銀行みたいな時代があった。それに対してアングロサクソンが巻き返してBIS規制などやって、日本は土地バブルに乗っかっているだけだと、その構造から金融戦争を仕掛けられて簡単に負けてしまう。90年代から失われた10年とかなっている。

そういう経過の中で何が問題か。若者に左翼の素晴らしかった体験が全然記憶として残っていない。これが最大の問題だと僕は思う。それをどうするかと考えたら、バブルまでアメリカを越えたという意識まで日本人は来た。そういう中で新自由主義がイデオロギー的に、特に計画的に大学とかマスコミを占拠して、ソ連崩壊以降はマルクス主義がガタガタになった経過もある。闘いもせず敗北していたとしか総括として言えない。なんで闘わずして敗北したかと言えば、日本のシステムは官と企業が人民を組織している体制であったことだ。僕らはそのことに無関心で、だいたい職業革命家という人間は就職したこともないし、世の中のこと分からない。分からないから理解不能で自分の狭い社会だけでやっている。日本は社会主義だと言われているけど、要は官が全部差配して、貧乏人にたいしては、官と企業がセーフネットを作ってやってきた。民衆が独自にやったことは数えるほどでほとんどない。逆にだから記憶にならない。

ところがそれではやっていけない時代が2005年くらいから意識され始めて、ワーキングプアみたいな特集がNHKでやられたり、今だと無縁社会と騒いでいる。そういう時期にどうするかを考えた時に、最小限綱領は僕の定義は資本主義の枠内で実現できる要求です。普通はそれで組織する。最大限綱領は資本主義の枠内では実現できない要求、僕は単純にそういう風にしか分類していない。枠内で実現できる要求で人は集まらない。どうしてもなくむかむかするというような人たちで、しかも記憶がないという人たちに対してどうするのが、僕らに投げかけられている問題みたいな気がしている。

それで一時期政策提言をやっていた。そういうことをやったから、逆に良く分かった。21世紀の社会システムを設計しようとしたら官の領域つまり公的セクター、営利の私的セクター、サードセクターと3つあって、その3つがセクターバランスを取れるような形がヨーロッパでは当たり前になっている。日本ではサードセクターの団体はある。農協とか労働組合とか生協とか。巨大な組織はあっても全然アイデンティティがない。自分たちがサードセクターに属しているというアイデンティティがない。

よく調べたら全部官にぶら下がっている。官の補助金漬けでぶら下がっている。2012年に国連が国際協同組合年と決めているから、それに向けてサードセクターのアイデンティティをどう作るかを考えている。サードセクター自身が、例えば日生協は共産党、労働組合は連合だと民主党とか、農協は自民党とか党派的にも違う。そんな中で一緒に集まったら何か絵が描けるのだけど、そんなこともできないような閉塞感がある。2005年くらいからNPOの団体、サードセクターをなんとかしよう、社会的経済をなんとかしようと団体（共生型経済推進フォーラム）を作って、2007年から政策提言しようとして無休で働いてきている。今内閣府の参与とか、新しい公共支援会議などに知っている人が10人くらい入っている。彼らを使って何かできるところまでいったけ

ど、肝心の首相が迷走しているから、泥船にみんな乗ってしまった。霞が関は全然別な世界です。生協の連合会の会長をやっていた河野さんが内閣府の参与になって、新しい公共の担当になった。そしたら、どんな仕事があるか。新しい公共の担当の各省の官僚が全部レクチャーに来る。そこで意見交換して、官僚もできることはやる。特に新しい公共と看板を掲げたら予算が付くから、すべての官庁が案を作って、いろいろやる。結局同じことをしている。日本型社会主義をやっている、新しい公共というこの間形成されてきたサードセクターに新たな植民地を作ろうとしている。私は鬱鬱の気分です。電話でこうしてほしいと言えぬ知り合いがいっぱいいるのに、全然違う力関係で動いている。それを何とかしないどうしようもない。

後記

冒頭の論文「反・脱原発運動の発展方向」で問題提起した事柄は、ルネサンス研究所基幹研究会報告の「質疑応答」の部分と接続していることがわかりました。日本の新旧左翼はいずれも日本の権力構造についての具体的知識がなく、権力を抽象的にしか規定していなかったのです。今問われていることは、実際に権力を握っている人たちの実像を描き出し、その人たちに羞恥心を感じてもらいたいような仕掛けが必要です。

情況の大下さんから27日に電話があり26日の福島のパレードの報告を受けましたが、役所が防災や避難について何もしていないと怒っていました。実はそこに日本の権力があるのです。上は霞ヶ関から下は末端の自治体に至るまで、今日すっかり統治機能を失った官僚制が組織されているのです。この官僚たちに組織的に批判のまなざしを向け、次のシステムを構想し提案することで彼らに退陣を求めることがなされてはいません。

自然発生的な批判のまなざしに対しては官僚組織は自己修正しようとしません。福島県知事が原発容認の姿勢を転換し、脱原発に舵を切ったり、自民党福島県連が原発推進の自己批判をしたり、また、原発推進の当事者である中曽根までが自然エネルギーに転換したりといった事態が進んでいます。いずれこの動きは霞ヶ関の中核にまで波及していくでしょう。支配の様式は何も変わらず、ただ原発推進から脱原発に舵を切る一億総懺悔が繰り返される予感がします。

このようなことになれば、本当に救われない。少なくとも原発推進側の人々の責任を追及する取り組みからはじめ、無責任体系と言われている日本の官僚制に責任を取らせることが必要です。そのためには人びとが自らの責任で電力行政や国の統治に関わっていくことが問われています。万事お任せにするという体質から決別することが肝心です。

基幹研究会報告に関して言えば私たちにできる事は自分たちが関わった武装闘争の総括と教訓であって、その一点からしか問題を提起できません。世界中の多様な運動を考慮すれば知らないことが圧倒的に多い。しかしお互いに知らなくとも連携できるような仕組みの提案がルネサンス研究所の役割でしょう。

ルネサンス研究所の議論では自己権力の重要性が指摘されています。今回の反・脱原発の闘争において、この自己権力の存在様式はどのようなものか、研究所はこれを解明できるのか、次号にはこの課題に取り組んでみたいと考えています。